

ダイバーはサンゴの味方



天敵の巻き貝4.6万個、手で拾う 高知・柏島

全国からダイバーが集まる高知県最西端の大月町柏島で、10年前の台風で壊滅したサンゴが復活している。ダイバーらが天敵の巻き貝4万6千個を手で拾ったり、成長のようすを知らせあったりするなど、ダイビングスポットならではの「見守り」が実を結んだ。

サンゴが復活したのは、柏島の北側沖。テーブル状のエンタクミドリイシが、長さ約500センチ、幅約100センチの海底を覆う。島のNPO法人「黒潮実

感センター」の神田優センター長によると、サンゴに被害が出たのは2003年から翌年。次々と台風が上陸し、サンゴを食べる巻き貝ヒメシロレイシガイダム

シの大発生で弱っていたサンゴを壊滅させた。

地元では直後から同センターやダイビングショップ、研究機関が連携。約1万平方メートルの岩場で、割れたサンゴを水中ボンブで接着した。成長を写真で記録したり被覆度を解析したりして、変化を知らせあった。ダイビングガイドが巻き貝を見つけたら、同業者や

04年の台風の被害から復活し、海底をおおうサンゴは10月10日、高知県大月町柏島沖、水野義則撮影。09年の柏島のサンゴダイビングショップ「アクアス」提供



客にも声を掛け、これまでに4万6千個以上を駆除した。ここ10年ほど大きな台風は直撃していないが、ダイバーが頻繁に入れなかった柏島の南西約3キロの蒲菜島では、今もサンゴは復活していない。

国立環境研究所の山野博哉さんは「地元を挙げてサンゴを観察・記録する活動はサンゴの変化の原因の究明にも活用できて貴重だ」と話している。(水野義則)

デジタル版に動画